

# 自閉症スペクトラム児と養育者の相互行為の分析

Analysis of interaction between parent and child with ASD

高橋 ゆう子

Yuko Takahashi

大妻女子大学家政学部

Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

キーワード : 自閉症スペクトラム, RDI, 子育て

Key words : Autism Spectrum Disorder, RDI, Raising children

## 1. 研究目的

自閉症スペクトラム障害の特徴の一つに、対人コミュニケーションの障害がある。多くの援助技法では、コミュニケーションの改善に向けたスキルの獲得が目指されるが、RDI (対人関係発達指導法) は、子どもへの直接的な療育・訓練ではなく、日々の子どもに関わる大人 (保護者、養育者) を対象とする継続的な教育やサポートに重点を置くことが特徴である (Gutstein, 2009)。したがって、援助にあたっては「家族が、発達に困難さをもつ子どもたちに、適切で効果的な養育を行えるよう」にエンパワーすることが、援助者 (RDI 認定コンサルタント) の役割となる。RDI のように、定型発達の子どもの養育者の乳幼児期からの相互行為の変容過程を参考に、養育者が子どもを導くことを重視した養育プログラムは新しく、養育者との関係性、相互行為への着目は、子どもの発達支援にも十分つながると思われる。

本報告の目的は、自閉症スペクトラム (以下、ASD) 児の養育に不安を持つ保護者と RDI を行うことによって、親子の関わり (相互行為) がどのように変化するか、その特徴と効果を検討し、相互行為のアセスメントの特徴について検討することである。

## 2. 研究内容及び成果

### ① 方法

#### [1] 研究協力者

ASD と診断された小 2 の男児とその保護者である。当初、報告された A 君の様子は、やりとりはできるが相手を見ないことが多く、相手に合わせることが難しいということであった。A 君は思い通りにならないと、年齢相応ではないふるまいを

することがあり、両親とも戸惑いつつ、親としてできることを模索して来談に至った。

#### [2] 分析

RDI では、開始時や効果の検討や課題抽出のために適宜、アセスメントを行うが、その対象は、多くの場合、親子で行うアクティビティ (ボールや太鼓でのやりとり、工作、パズル、写真や本を見る等) である。今回、開始時と 1 年半、RDI に取り組んだ時点の 2 回が分析の対象となる。親子の相互行為に関するアセスメントは次の 3 つのスケールである (Larkin ら, 2010)。

まず注意、視線の共有に関すること (Attention Engagement)、次に親子の交流における相互作用的な調整 (Interactive Regulation: IR)、そして間主観性 (Interactive Engagement: IE) に関する取り組みや関わりである。Table.1 から Table.3 に示したように、各スケールには 4 つのレベルがあり、今回、発表者を含む、RDI 認定コンサルタント 4 名が、3 つのスケールのそれぞれ 4 つのレベルレベルについて、Table.4 のように、コーディング (頻度) を行った (分析 1)。

さらに保護者から得られた報告や記述も分析対象とし、そこから父親、母親の子どもとの関わりの変化の特徴を抽出した (分析 2)。

#### [3] コンサルテーションの方法

インターネットのクラウドシステムを使って、アセスメントの結果を元に、コンサルタントが、両親に対して課題を出す。その後、提出された文章や映像を元に、直接会って話しあったり、保護者の参考となるように、コンサルタントが子どもとデモンストレーションを行ったりしながら、親子にとって課題となることを抽出し、検討する。そして保護者は、次の課題に取り組むというやり

とりをコンサルタントとの間で繰り返した。

Table.1 共同注意の4つのレベル

Level	Value	Description
U: Unengaged 注意と取り組み のなさ	-2	子どもは他者(他人)にも対象(物), 出来事にも注意を向けない。
SE: Solitary engagement 単独・単一の注 意・関わり	-1	子どもは, 物だけに注意を向けて関わっている。
SJA: Supported joint attention サポートされた 共同注意	1	親子は, 同じ物(対象)に注意を向けて関わっているが, 子どもは親の関与には積極的に気を留めていない。
CJA: Coordinated joint attention 連動・統合された 共同注意	2	親子は, 同じ物(対象)に, また互い(相手)に対しても注意を向けて関わっている。

Table.2 相互調整の4つのレベル

Level	Value	Description
Lack: Lack of contingency (偶然性への偶発 的な調整・一致が 見られない)	-2	両者は, おそらく(相互作用の)中断・分裂; 共同の取り組み・関わりへの欠如, あるいはバラバラな(協調・調整のない)取り組み・関わりを経験している。
Static: Contingency without elaboration (工夫のない偶然 性への偶発的な調 整・一致)	-1	両者の取り組み・関わりは, 協調・一致・調整されているが, その代わり, すべての変化やバリエーションや共同活動の豊かさが排除されてしまっている。
Unbalanced: Contingency without balance (バランスのない 偶然性への偶発的 な調整・一致)	1	偶然性への偶発的な調整・一致・随伴行動や, (取り組みを)より良くするための工夫はどちらも見られるが, どちらか一方だけが, 偶発的な調整と取り組みの工夫を行っている。
Balanced: Balanced contingency and elaboration (バランスのとれた 偶然性へ偶発的 な調整と工夫)	2	お互いへの思いやり・配慮と敏感な応答性, また共通のゴールや意図についても, そういった感覚・印象が認められる。両者とも, 共同・協力の取り組みを強化, 向上させるようなバリエーションを加えている。

Table.3 間主観性の4つのレベル

Level	Value	Description
None (交流は見られ ず)	-2	二人の間に関わり・交流がない。もしくは何ら相互作用パターンのない身体接触のみ。
CA: Coordination of actions (行為の協調・一 致・調整)	-1	道具的コミュニケーション: 両者はお互いに, 断片的な, つながりのない行動・活動においてのみ, 働きかけ, 関わる。
CI: Coordination of intentions (意図の協調・一 致・調整)	1	両者は, 相手の行動を予測し, 共通のゴールに向けて動いてゆく。
CE: Coordination of experience (経験の協調・一 致・調整)	2	両者は, 感情・情緒的な関わりを見せ, 相手の反応への関心を示す。そして意見や記憶を共有したり, 象徴的なやり方で物を扱ったりする。

Table.4 3つのスケールの4レベルに対する  
コーディング

Fluency	Coding	Note
Usual: 普通に生起	3	定型発達児と保護者のよう
Often: しばしば	2	6,7回
Sometimes: ときどき	1	2,3回
Not at all: 全くない	0	0回

## ② 結果

### [1]親子の関わり(相互行為)の変容

Fig.1 と Fig.2 は母親, 父親, それぞれと子どもとの関わり(3つのスケール)について集計したものである。各スケールのレベルごとの重みづけ(value)にコーディング(coding)された値をかけたものを合計し, それを評定者数で割って平均を算出した。

Fig.1 をみると母親の場合, 注意, 相互調整, 間主観性に関する取り組み, すべてに変化が見られた。報告によると, 母親は当初, 遊びや何気ないやりとりにおいても, 説明することで子どもが納得できるように働きかけることが多かったという。開始時のスケールの得点も極めて低かったが, RDIの取り組みを通して大きく変化したことがわかる。それに対して父親の場合(Fig.2), 開始時と比べると, 共同注意の値がやや低くなったものの, 間主観性の状態が大きく変化した。

### [2]両親の取り組みの変容

母親からは, 日常生活における自身の子どもへの関わりと子どもの行動が関連することに気づいたという報告や記述が増えた。一方, 父親は, 記述は多くないものの, 積極的に日常生活でのやり

とりの映像を撮ることを意識し、映像の詳細について報告するようになった。父親、母親の共通点としては、夫婦で話し合うことやそれぞれが考えていることを共有する機会が増えて、お互いのことだけでなく、子どもに対する思いや考えなども含めて理解しやすくなったことが挙げられた。

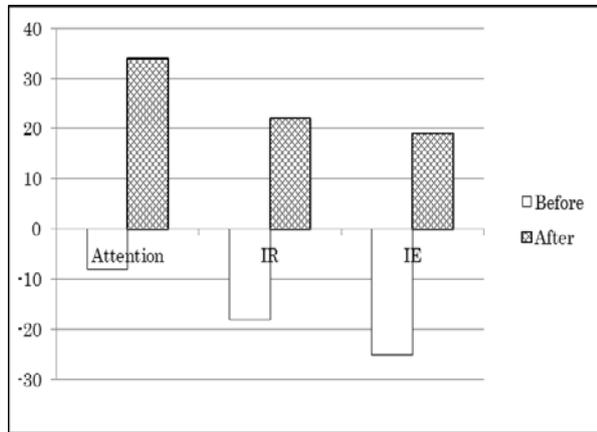


Fig.1 Mean scores on Global Ratings Overall Codes (Mom & Child)

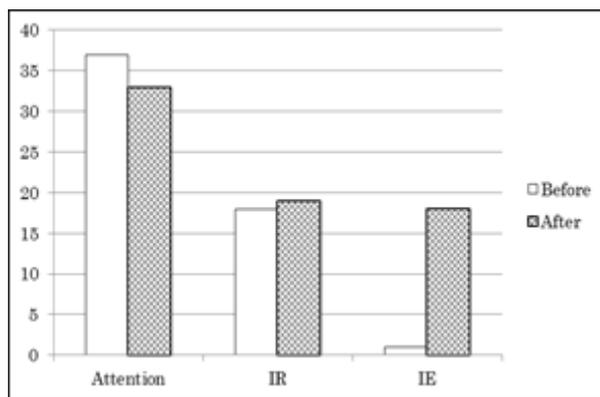


Fig.2 Mean scores on Global Ratings Overall Codes (Dad & Child)

### 3. まとめと今後の課題

#### ① 親子の相互行為の特徴と RDI の効果

今回、分析の対象となった保護者が RDI に取り組むプロセスにおいて、最初の頃に気づいたことは、まず、子どもに対して口頭で指示することが多いということであった。そのことが映像の分析を通して明らかになり、言葉でのやりとりが多くなると、視線の共有が少なくなり、結果的にズレが生じ、予想と異なる事態になったとしても修正しにくくなっていることがわかった。そこで、保護者は言葉を減らそうとするが、なかなかうまくいかず保護者の表情がやや固くなり、かえってス

ムズなやりとりができなくなるなど悪循環が生じやすくなることが推測された。

コミュニケーションには、言語的、非言語的の 2 側面があるが、社会的交流に用いられる非言語的コミュニケーションが困難なのは、ASD の特徴の一つである。子どもの加齢に伴って言語発達が著しくなると、言語を介したコミュニケーションが優位になりがちであるが、非言語的側面がコミュニケーションに及ぼす影響を改めて認識する必要があると思われた。

具体的には今回、話す内容ではなく、声のトーンや表情、しぐさを意識して活用することでやりとりのペースが変わり、子どもが保護者を見たり、確認したりするなど、視線を共有する機会が増えた。そのような変容の背景には、保護者の子どもとの向き合い方、構えが関係することが推測された。どちらかという RDI を始める前は、両親とも「大切なことは言葉でしっかり使えなくてはならない」とか、「効率的にやれるように大事なことはていねいに伝えたい」という思いが先行していたことが明らかになった。つまり、目の前でやりとりしている A 君の様子やその場の状況の理解よりも、未来や将来のことを想定した「望ましい姿」を念頭に入れた関わりが優先して、結果的に、保護者からの働きかけが一方的になりがちだったということである。

そこで、コンサルタントは、保護者にその場の感じや感覚に敏感になることを提案し、「こんなふうにさせたい」という思いを脇に置いておいて、一緒にやっているときの感じや、やっていることの共有を意識して、言葉にならない感じを表現することを試みたところ、子どもからも自分の思いや感じが表示されるようになった。これらの保護者の関わりは、直接的、指示的ではないからこそ、子どもに感じ、考え、判断する機会が提供されることになる。このように、保護者の態度の変容は、子どもとのやりとりに影響し、保護者からの言葉以外のあいまいなメッセージを受け止めた上で返すという、子どもに備わっている力、リソースを引き出したといえる。

Hobson (1989) は、ASD 児の「人として他の人とかわるものの難しさは、他の人々が世界に関わる関わり方を、その人のパースペクティブに身を置いて感知することができないこと」であり、「他の人々との情緒的関係の障害」といえるとする。このような指摘を踏まえても、関係性を考慮

した支援、関係のあり方、相互行為への着目が重要であることがいえ、今回の A 君と保護者の相互行為の分析は、基本的な情緒的関係の築き直しの重要性を示唆したといえる。

## ② 相互行為のアセスメントの検討と課題

子どもの能力のアセスメントは、多くの場合、何かしら取り組んだ課題の成果、ある時点での結果の評価となるが、相互行為のアセスメントは、二者間のやりとりのプロセス、関係性を評価することになるので、複雑にならざるをえない。

例えば、今回、実施した Attention Engagement (共同注意、視線の共有) についてみると、“A 君が主張したくて、また楽しくてやや興奮気味に父親を頻繁に見ること”と、“お互いに楽しいと感じることを確認するつもりで視線を交わす、視線を共有すること”の区別はかなり難しいと思われた。開始時のアセスメントで視線の共有が多かったのは、A 君からの発信がとて多く、それを父親が受け止めていたことが推測された。1 年半経過したときのアセスメントでは、発信が父親と A 君の双方からなされ、やりとりの流れがスムーズになったため、確認するような、明らかな視線の共有が減ったことが考えられた。そのことは、間主観性の平均点が著しく高くなったことから裏付けられる。参考までに分析した定型発達児と保護者のやりとりの映像を分析しても、流れがかなりスムーズであると、お互いを意識しながらも視線の共有がさりげなくなっており、A 君と父親のやりとりもそのような状況に近くなったことが推測された。

ASD 児の場合、養育者から発信されたことに対して、子どもが自発的に視線、注意を向けて受け止め、共にいる状況を共有し、一緒に協力しながら活動を継続することが困難な場合が多い。したがってアセスメントにあたっては、一方が相手を

見たかどうかよりも、双方のやりとりや文脈を踏まえる必要がある。このようにしてみると、相互行為のアセスメントは容易ではないが、重要なのは、アセスメントを試みるプロセスにおいて、普段は気づきにくい点やわずかな変化を養育者と援助者が共有することによって、養育者の気づきが促され、それが次の子どもとのやりとりに活かされることである。そのような試みが、相互行為の固定化を防ぎ、悪循環を断ち切ることになると思われる。そのためにも、相互行為におけるわずかな変化を捉えられるようなアセスメントを検討して支援につなげていくことが今後の課題となる。

## 参考文献

- [1]Hobson, P. (1989) 認知を越えて—自閉症の理論, 野村東助訳, In Dawson, G. Autism: Nature, Diagnosis, and Treatment. New York: The Guilford Press.野村東助・清水康夫監訳 (1994) 自閉症—その本態, 診断および治療. 日本文化科学社.
- [2]Larkin, F.et al. (2010) The relationship Development Assessment -Research Version: Preliminary validation of a clinical tool and coding schemes to measure parent-child interaction in autism. Clinical Child Psychology, Vol, 20, No.10, 1-22.
- [3]Steven E, Gutstein (2009) The RDI Book: Forging New Pathways for Autism's and PDD with the Relationship Development Intervention Program, Connections Center Publishing.

## 4. この助成による学会発表

高橋ゆう子「自閉症スペクトラム児の保護者に対する養育支援としての RDI の効果」日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 2015 年 9 月 17 日, 神戸国際会議場, 兵庫県神戸市

(2016 年 3 月 31 日現在)